

浮雪居士と瀉瓶

李 乾 熙

浮雪居士は本来韓国湖南の三大靈地である辺山の月明庵を開いた新羅の禪僧であつたが、後に結婚して居士となつた人物である。その得度名が浮雪であることが明らかであるにもかかわらず、いまだに浮雪居士として伝えられているのは、名前が明確でないからではなく、口伝の過程において、浮雪という名よりも、その意味に於いて雲水たちの生活により適わしい「浮雲」のイメージを持つ名前が伝記全体に適切であるからではないかと思われる。更に別の憶測が許されるならば後世編まれた記録としての『浮雪』に対して、より古い伝統性を持つと思われる口伝の特殊性を強調せんがために敢て浮雪の無常に満ちた人生を示す「浮雲」という名を伝えていくようにも思われる。ともあれその浮雪居士が『伝』に書かれていくように浮雲ではなく浮雪であることは間違いない。

この浮雪居士を韓国文学の世界に紹介し、その小説的な歴史的价值を高めたのは、一九三二年十二月に出版された仏敎時報社の『浮雪居士』である。また一九三九年には、韓

国の小説文学研究の分野に於いてその体裁を基礎づけたといわれる金台俊氏が『朝鮮小説史』に於いて浮雪居士を高く評価したのである。このように古くから宗門に於いて重要な位置を占めながら、口伝にしろ碑文または記録にしろ、浮雪居士の生涯のその後の研究はまったく進ず、従つて人々に深く知られることはなかったが、最近になつて黄涓江氏の『新羅仏敎説話研究』の中の附録にこの浮雪伝が発表されることになつて一歩近づくことができた。しかしここにも印刷のミスかも知れないが今回私が調べた浮雪伝との異なるところもあった。例えば浮雪の字は『伝』では宜祥であるが天祥になつているが、恐らくこれは印刷のミスというより前述の『浮雪居士』をそのまま写したためと見られる。年代分析においてもその根拠となる資料を待たざるを得ないが、黄氏の「宗教的、文学的意義を究明し、小説系統の發生の歴史的時期を溯源して見よう」としたころみは高く評価すべきである。

さて浮雪居士伝の根拠となる実証的史料を求めるならば、

それは月明庵に現存している浮雪伝以外にはあり得ないであろう。さもなければ説話がもつ独特のフィクション的側面ばかりが強調され伝えられるのみである。いま月明庵に保存されているこの浮雪伝は、韓国に数多く伝えられている仏教説話の中で唯一独特な意味をもつ最も古い仏教説話の一つであると思われる。というのも瀉瓶にまつわる浮雪居士の伝記がそれを十分に我々に答えてくれるからである。伝記では「瓶水」と見え、これを李能和氏は『朝鮮仏教通史』下巻に於いて「功熟水」と解している。いわば功德を積み得て熟した水との意味であろう。

この浮雪伝がいつどのようにして作られたのかは分らない。ただ新羅の神文王十一（六九二）年、月明庵が完成される頃にこの浮雪伝も作られたと思われる。というのは月明庵の庵名はその伝記中に登場する娘の名に由来することが記されているからである。私が二十五年前に月明庵を訪ねた時には伽藍も老朽して一安居を過すにも大衆が宿るところもない始末であった。ところが今回の調査に訪れた時には、伽藍は整備され法堂以外にも大きな建物が重創され大寺院になっていた。法堂前には簡単な寺の案内板があって、その内容は明らかに『伝』によるものと見られるが、娘に関しては口伝によって書かれていた。

寺に伝えられている『伝』は、全文が漢字で書かれていて

浮雪居士と瀉瓶（李）

十枚である。一頁十行で、一行十四字又は十五字、縦書の楷書である。絹表紙の上中下三カ所に二つづつ穴をあけ、それぞれ白糸で結んである。その内容を見ると、浮雪居士は五歳にして仏国寺円諱について出家し、勉強に励んだ後、辺山に妙寂庵を建立し、道友靈照、靈熙とともに修行に勤しみ文殊の道場である五台山に参拝の途上、熱心な仏教信者である仇無宛の家に投宿した。ところが娘の妙花はどうしても浮雪居士と一緒にいたいと、さもなければ死ぬというので両親は浮雪居士に娘を助けて下さいと祈願するのである。初めは戒を破ることはできないとして断るが、命の尊貴を察し衆生を救済する菩薩の慈悲心を起し妙花と結婚するのである。これを見た二人の道友は離れていく。その後浮雪居士は二人の子供を得、息子を登雲、娘を月明と名付けた。在家にあって修行に励むこと二十年。ある日かつての道友たちが訪れる、浮雪はその修行の成熟をはかるため三つの瓶に水を入れて棟にかけ、三人が一瓶ずつ打ったところ道友の場合は瓶も水も流れてしまいが浮雪居士は瓶はわれても瓶水は空中に一滴ももれることなく移瀉され懸れたのである。驚く二人に浮雪居士は「雲光は独路して根塵を脱し、真常は生滅に拘らず体露す。幻身は生滅に随って遷流すること瓶の破卒に似たり。真性は本来靈明にして常住すること水が空中に懸れるが如し」と告げる。のち二人は浮雪居士の舍利を集め妙寂山の麓に舍利

塔を建立する。登雲、月明も出家し修行に励み、臨終には涅槃相を現じて方便門を開いた。これを記念して登雲庵と月明庵が建立されたと記録している。これが『浮雪伝』の概略である。いまでも浮雪居士の舍利塔は月明庵麓に祀られている。

もともと瓶というのは浄瓶として僧の身まわりの日常生活の用具である。それはむしろ中身の水を使う為のものであってその瓶が主役ではない。東大寺の凝然は『八宗綱要』律宗の項で五師瀉瓶とか一味瀉瓶として取り挙げている。即ち「真直ぐに師から弟子へと伝わった」（鎌田茂雄全訳注『八宗綱要』講談社学術文庫一九八一年十月一三九頁）と解している。これは初期仏法の部派がまだ分れなく一つの流れとして異った意見が生じなかったことであり、『釈氏要覧』に「阿難が仏法を領収すること瓶の水を別器に写すにあまることなきが如し。水則ち別ることなし」と。この文の根拠は『大般涅槃經』卷四十にある「阿難我れに事すること二十余年…一度経を耳にすれば再び問わず。瓶の水を写して一瓶にするが如し」からの引用と思われる。即ちその瓶は水を入れる道具にすぎないことで法を伝える人間又は真理を見る為のかざりである。故にそれは決して本質にはなれない仮象的なもので反って本質を見るに障けになる可能性もある。だから浮雪居士は彼らに瓶を打たせたのであり、だた律の中に安住しての安易な修行の態度を厳しく叱したのであり、出家のみが成仏できるの

でなく、在家に於いても修行をすれば解脱できることを教えたのである。後に禪が興隆するようになるとこの浄瓶と瓶水は生活必需品とされながらも、本来の意味を失う。しかし他方、浄瓶はやがて伝法の証として用いられるようになっていく。もはやそこでは瓶も水も法そのものになってしまふ。

しかし素朴な原典に基いて考えるならば浮雪伝の瓶水の物語りはやはり僧伝としての大きな小説的意味をもっている。果してこれら『伝』に見える浮雪の物語りが七世紀の新羅仏教の思想から生れ出たものであるかどうかこれからの研究を要するである。少くとも浮雪伝と口伝との綜合によって、新羅の初期の仏教説話だけでもなく、また律を重んじる百濟の仏教からだけでもない、もう一つ別の思想流が背景にあることを認めうるのではないかと思う。それはむしろ新羅の初期仏教よりも早く流れていたものであるように思われる。もしそこに一つの流れがあるとすれば、それは加羅国即ち加耶になるが、その百濟と新羅の仏法を融合しまさに超え出ようとした思想の発展がここには歴々と見られるのである。私たちは加耶仏教に対してもっと目を向けるべきではないか。とまれ、『伝』は三国仏教全盛期に於ける原始的葛藤を示している勝れた作品である。